詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

宿坊の戞々と割る寒卵
川越市　益子さとし

△評▽宿坊の朝げの卵を割る音が次々に聞こえる。硬いものが触れ合う音の描写に、寒中の張り詰めた空気が心地よく伝わる。

手鏡を重しと母の言ふ寒夜
西尾市　金子　恵美

△評▽病床のお母さんだろうか。いつも手にする手鏡が重いのは、寒さの故だけではあるまい。

寒林に道あり朝日あたりをり
東京　山口　治子

大寒のつま立ちてゆく廊下かな
大阪　芹澤　由美

元栓を閉めて迎へる寒波かな
小林市　黒木　暢

初閻魔政治に無関心の子と
志木市　谷村　康志

整然と直線ばかり冬座敷
つくば市　村越　陽一

いばらきの訛終生納豆汁
下妻市　神郡　貢

一人来てまた一人来て初社
小田原市　林　梢

見るからに柔らかそうな春の雲
磐田市　勝野　廣宣

井上　康明　選

池普請地底に太きタイヤ痕
海南市　岡　哲夫

△評▽水を抜いた池の底のタイヤの跡。黒い土の凹凸は、かつて池に入ったトラックのわだちなのだろうか、地底の一語が生きている。

雑踏の顔を叩いて霰かな
町田市　岡　良

△評▽顔をたたいてというクローズアップによって、先を急ぐ人々のさまざまな表情が見えてくる。

夜も青き空に白雲龍太の忌
唐津市　梶山　守

川岸を離れぬカメラ日脚伸ぶ
相模原市　小山　鞠子

今年また母の忌日の日照り雪
周南市　九内　千沙

池普請雷魚の揺らすドラム缶
名古屋市　可知　豊親

春寒し刺客列伝読み終へる
東京　野上　卓

寒稽古受身で畳叩く音
岡山市　三好　泥子

寒鴉干潟に下りて飛びたたず
宇陀市　泉尾　武則

一族を印す太扉ちよろぎ食む
さいたま市　関根　道豊

片山由美子　選

病院の匂ひにも慣れ春隣
東久留米市　夏目あたる

△評▽入院が長引いているのだろう。慣れたことを喜んでいるわけではない。「春隣」という季語が希望を感じさせるのが救い。

点滴の一滴ひかる春隣
防府市　倉重　遥代

△評▽外界と隔てられた病室でも季節の動きは感じられる。点滴の光が春を運んでくるかのよう。

冬ぬくし土曜の昼をうとうとと
大洲市　坂本　梨帆

譲られて富士見える席旅始
いわき市　坂本　節子

焚火して誰からとなく齢のこと
出雲市　石原　清司

利根川の夕日の中の浮寝鳥
神栖市　田中　陶白

遥かなるゲーテ街道風光る
伊賀市　福沢　義男

霜の朝今太陽の上りたる
日高市　落合　清子

掃き寄する落葉の中に光るもの
神戸市　常澤　俶子

藤の実の枯れて日差しを存分に
和歌山市　宮本　啓子

小川　軽舟　選

木蓮の千の莟や満を持す
春日市　林田　久子

△評▽モクレンの大木が開花を目前に控える。「満を持す」の慣用句が、大きなつぼみを一斉に開くモクレンにふさわしい。

雪掻きの息の駅長切符切る
平塚市　高橋　佳代

△評▽ローカル線の駅長だ。一人で何でもこなす。はずんだ息の白さが目に見えるよう。

石打ちて火を創るべし冬の森
高松市　稲　暁

おでん屋の窓を夕日が通り過ぐ
長浜市　中島　正則

客待ちの似顔絵描きの悴めり
香芝市　山本　合一

冬帝やボディビルダー黒光り
桜川市　海老原順子

なわばりはからだひとつの海鼠かな
山形　佐藤美和緒

部活へと急ぐ少年寒の朝
吉野川市　喜島　成幸

湯豆腐や父の形見の安き猪口
佐世保市　相川　正敏

寒晴や竹青々と空を掃く
柏市　小畑　昌司

新刊

＜句集＞

◇福永法弘『永』　第4句集。経営を任された京都の老舗ホテルが、コロナ禍の中で苦境に陥ったことを詠んだ△誰も来ぬホテルのロビー雛（ひな）飾る▽△客の無きホテルのロビー武具飾る▽など、時代をくっきりと映す句集でもある。（角川文化振興財団・2970円）

◇嵯峨根鈴子『ちはやぶるう』　第4句集。一見かろやかでありながら、その奥に、ことばにできない悲しみや喜びを滑り込ませた一冊。△花柄に母おはします福沸（ふくわかし）▽△結び目がてふてふなんてクリスマス▽△開くたび慌てて点（とも）る冷蔵庫▽（青磁社・2750円）

◇三村純也『高天（たかま）』　第6句集。大阪・船場に生まれ、現在は神戸住まいの著者ならではの含羞に満ちた一冊である。△淀屋橋さへ渡れざる吹雪かな▽△春着の子はきはきものを言ひにけり▽△水光りをらぬところは薄氷▽（朔出版・2970円）

（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇井谷まさみち『めぐる七曜』　64歳から5年間の作品を収録した、和歌山市在住の著者の第6歌集。妻との穏やかな暮らしや身の回りの自然を、自らの言葉で整った調べにのせてこまやかにとらえる。△はるかにも恋ふ紀ノ川の源流に始まりゐむか芽吹きの季節▽（短歌研究社・3080円）

◇矢部雅之『Another Good Day!』　第2歌集。ビデオカメラマンとして米ニューヨークを拠点に過ごした2008年から14年までの作品を収録する。映像化された場面が魅力。△パリセイド　そのあしもとをひたぬらし川たひらかに冬日にほふ▽（書肆侃侃房・2420円）

◇斎藤美衣『世界を信じる』　30歳のときに夫と共に起業した抱っこ紐（ひも）の会社での仕事の歌、子育ての歌が印象的である。繊細な感性を見せる第1歌集。△修理されるために届きし抱つこ紐　よその暮らしのにほひをさせて▽（典々堂・2970円）（歌人・中川佐和子）